



図書だより

最上校図書委員会 No.15 12月18日

三島由紀夫 (1925年~1970年) 没後50年

戦後の高度経済成長期に活躍、昭和を駆け抜けた多彩な作家 三島由紀夫



東京都東京市四谷区永住町（現・東京都新宿区四谷）
1925年（大正14年）に生まれ、1970年（昭和45年）
に自衛隊市ヶ谷駐屯地で割腹自殺をし、45歳の生涯を
閉じるまでの歩みは、軍国主義、敗戦、復興と経済成長
といった昭和史と共にあり、まさに「昭和の申し子」と
もいべき作家であったといえるでしょう。

強固な美意識と華麗な文体で独自の文学
世界を繰り広げて、国内外を問わず評価
されていました。強烈な個性を放ち、今なお色あせない魅力を持つ作品の
中から、気になる作品を読んでみませんか。

「花ざかり森」 1941年発行

16歳の時に執筆、三島由紀夫を筆名とし、人気作家になる。

「仮面の告白」 1949年発行

24歳の時に執筆、同性愛がテーマの小説。

「潮騒」 1954年発行

漁師の若者と島の有力者の娘との純愛物語。

「金閣寺」 1960年発行

実際にあった放火事件を題材に、金閣寺の美に憑かれた
学僧が寺を放火するまでの経緯をつづった物語。

「豊饒の海」 1965年~1971年発行

夢と転生がテーマの四部作。

（春の雪）（奔馬）（暁の寺）（天人五衰）



かるた大会のお知らせ

期 日：1月14日（木）

時 間：午後3時50分~

場 所：図書館

シングルス：犬棒かるた

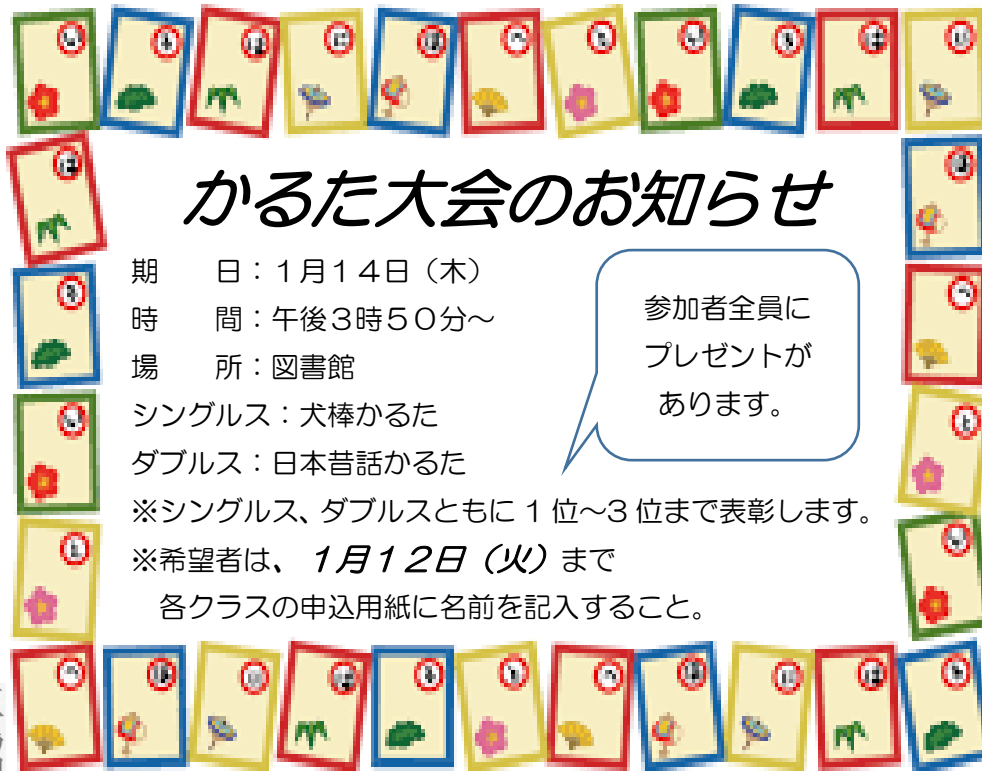
ダブルス：日本昔話かるた

※シングルス、ダブルスともに1位~3位まで表彰します。

※希望者は、1月12日（火）まで

各クラスの申込用紙に名前を記入すること。

参加者全員に
プレゼントが
あります。



長期貸し出しのお知らせ

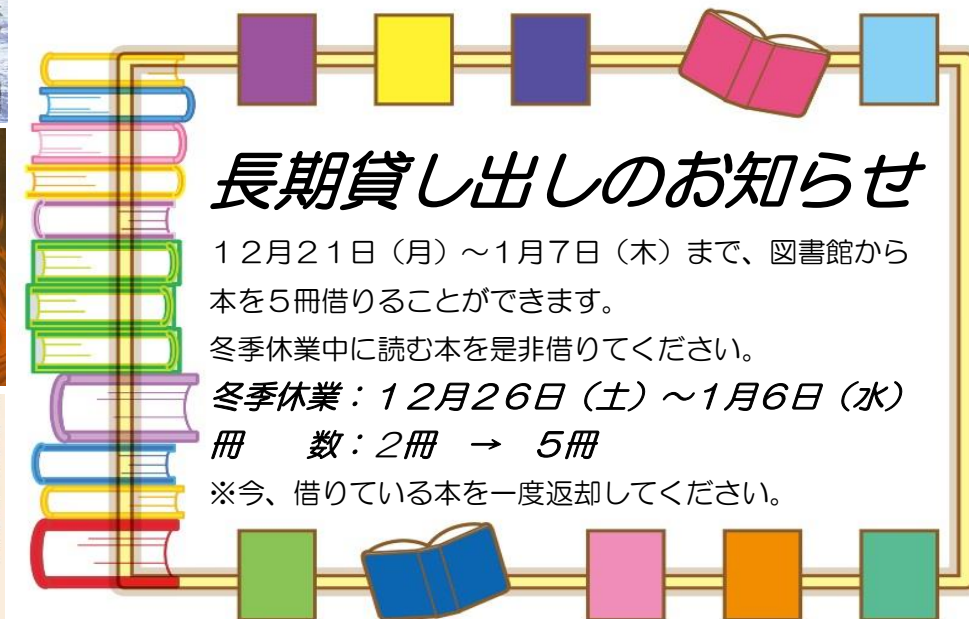
12月21日（月）~1月7日（木）まで、図書館から
本を5冊借りることができます。

冬季休業中に読む本を是非借りてください。

冬季休業：12月26日（土）~1月6日（水）

冊 数：2冊 → 5冊

※今、借りている本を一度返却してください。



冬季休業中にオススメの本

BOOK OF THE YEAR 2020

いろいろあった1年でしたが、そんな今年もたくさんの本が生まれました。

あなたにとっての大切な本と出会えましたか？ あなたの、今年いちばんよかった本は？

全国の本好きの声を集めた、この1年の総決算！

選出されな中から、学校に蔵書している本を紹介します。

「逆ソクラテス」 伊坂幸太郎著

逆境にもめげず、簡単ではない現実立ち向かい、非日常的な出来事に巻き込まれながらも、アンハッピーな展開を乗り越え、僕たちは逆転する！

「クスノキの番人」 東野圭吾著

その木に祈れば、願いが叶うと言われているクスノキ。その番人を任された青年と、クスノキのもとへ祈念に訪れる人々の織りなす物語。

「ライオンのおやつ」 小川糸著

雫は最後の日々を過ごす場所として、瀬戸内の島にあるホスピスを選んだ。思い出のおやつをリクエストできる時間があるのだが、雫は選べずにいた。

「少年と犬」 馳星周著

震災で職を失い、犯罪に手を染めた男が拾った犬は南の方角に顔を向けていた。その犬・多聞は南へと旅を始める。傷つき悩む人々と彼らに寄り添う犬を描いた、犬を愛するすべての人に捧げる感涙作。

「イマジン」 有川浩著

聞き慣れない業界用語が飛び交う現場に戸惑う日々だが、そこは現実と物語を繋げる、魔法の世界だった。



「四畳半タイムマシンブルース」 森見登美彦著

気ままな連中が“昨日”を改変。世界の存続と恋の行方は！？

「一人称単数」 村上春樹著

私はもう私でなくなり、僕はもう僕でなくなっていく。そして、そう、あなたはもうあなたでなくなっていく。そこで何が起こり、何が起こらなかったのか？

「祝祭と予感」 恩田陸著

大好きな仲間たちの、知らなかった秘密。「蜜蜂と遠雷」スピンオフ短編小説集、全6編。

「わたしの美しい庭」 風見ゆづ著

マンションの屋上庭園の奥にある「縁切り神社」。そこを訪れるく生きづらさを抱えた人たちと、「わたし」の物語。

「ツナグ 想い人の心得」 辻村深月著

後悔を抱えて生きる人々の心を繋ぐ、使者の物語。

「十字架のカルテ」 知念実希人著

正確な鑑定のためにはあらゆる手を尽くす。究極の頭脳戦の果てに、影山が見据える未来とは。

「カケラ」 湊かなえ著

他人の視線と自分の理想。

少女の心を追い詰めたものとは——？

「同姓同名」 下村敦史著

これは、一度でも自分の名前を検索したことのある、名もなき私たちの物語です。

「暴虎の牙」 柚月裕子著

広島のマル暴刑事・大上章吾の前に現れた、最凶の敵。愚連隊「呉寅会」を率いる沖虎彦の暴走を、大上とその愛弟子である日岡は止められるのか？

「この気持ちもいつか忘れる」 住野よる著

退屈な日常に絶望するカヤの前に現れた、まばゆい光。爪と目しか見えない異世界の少女との出会いだった。

